
定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その7) Community Clinical Psychological Support of an Evening High school (VII)

松下秀平 中森涼太 植松大起 太田靖子
下枝里子 中谷汐里 中田行重
関西大学大学院心理学研究科心理臨床学専攻

Syuhei MATSUSHITA, Ryota NAKAMORI, Daiki UEMATSU, Yasuko OTA
Eriko SHIMO, Shiori NAKATANI, Yukishige NAKATA
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

ある定時制高校への大学院生による地域臨床的な支援活動は今年で7年目となった。今年度も昨年度に引き続き「改訂版支援モデル（循環型）」に基づいて、相談活動や教室内支援、グループワークの実施、先生方との共有ファイルによる情報共有、広報活動を行った。また、新たな取り組みとして本支援活動を客観的なフィードバックを加えて考察するため、アンケート調査を実施した。本稿では、筆者らの活動内容について報告して考察するのに加え、アンケート調査による客観的なフィードバックからも活動内容について考察した。その結果、支援活動は生徒から概ね認知され、先生方からも評価も受けているが、先生方との連携を更に強めることが今後の課題として浮かび上がった。そのためには、先生方との日頃からの関係づくりが重要であることが示唆された。

キーワード：定時制高校、アンケート、グループワーク

Abstract

It has been 7 years since a team of graduate students began offering psychological support to an evening high school. This year, we continued to enhance the activities based on “the revised support model” (circulation type) from last year, supported students during class, produced a group project, shared information with teachers through shared files, and issued counseling room communications. In addition, as a new initiative, we conducted a questionnaire survey to consider this support activity with objective feedback. In this paper, in addition to reporting and discussing the activities of our authors, we also considered the content of activities from objective feedback by questionnaire survey. It was concluded that, although our activities are mostly acknowledged and needed by the students and teachers, it is important to make use of any contact with the teachers to enhance relationships with them.

Key Words: evening high school, questionnaire, group work

はじめに

ある定時制高校における地域臨床的な支援活動も、筆者らで7年目を迎えた（中田・中村・日野ら 2011；倉石・横谷・梅井ら 2012；山見・細見・吉川ら 2013；井上・大川・渋川ら 2014；清水・妹尾・有福ら 2015；清澤・川田・構ら 2016）。これまで、定時制高校の支援要請に対して教員と大学院生によるチームを組み、主に大学院生がボランティアとして支援する試みを続けてきた。これまでの活動を通し、井上・大川・渋川ら（2014）は、「改訂版支援モデル」を提示した。翌年、清水・妹尾・有福ら（2015）は、改訂版支援モデルの有効性を明らかにすると共に、「改訂版支援モデル（循環型）」を提示した（Figure1）。このモデルでは、①浸透化⑤支援メンバー内の活動⑥先生との連携が、②グループワーク（以下GW）③相談活動④教室内支援に相互作用しており、両者を充実させることで良い循環が生まれることを示した。昨年度の清澤・川田・構ら（2016）では、提示された「改訂版支援モデル（循環型）」に基づき、活動を行った。今年度は、昨年と同様に「改訂版支援モデル（循環型）」（清水・妹尾・有福ら 2015）に基づき、活動を行うこととした。

本稿では、清澤・川田・構ら（2016）に引き継いで行った活動内容に、新たに力を入れて行った取り組みを含めて報告する。加えて、「改訂

版支援モデル（循環型）」に基づいた活動の現状を把握する手がかりとして、アンケート調査を行ったものに考察を加え、これまでの活動を振り返ると共に、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

今年度の活動

1. 基本的な活動

今年度の支援活動体制、活動内容を以下に簡潔に記載する。

本活動は筆者ら大学院生6名（以下、支援メンバー）と1名の教員で構成され、各曜日に支援メンバーが3名ずつに分かれて担当している。活動日は生徒が登校している期間の、月曜日と木曜日の週2回である。支援活動時間（19：25～20：40）は、給食の時間から3限終了時刻である。また、場所は校内の一室を借り、「ほっとステーション（以下HS）」という名称で生徒相談室を開室し、相談活動を行っている。その他にも、校内巡回、教室内支援、GWを行っている。さらに、スポーツ大会、文化祭、餅つき大会などの学校行事にも積極的に参加している。以上の活動の中で、教室内支援で関わった生徒数を除く本年度の生徒対応数を Table1、比較して昨年度の生徒対応数を Table2 に示す。

1-1. 相談活動

HSには支援メンバーが1～2名常駐し、来

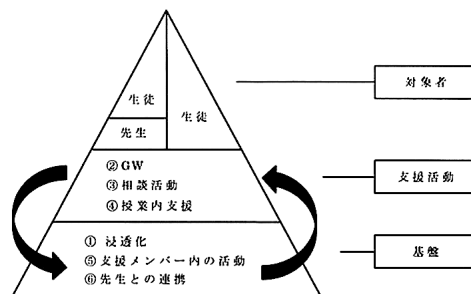


Figure 1 改訂版支援モデル（循環型）

Table 1 入室者数一覧（今年度）（単位：人）

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
4月	11	16	12	10	49
5月	18	18	16	19	71
6月	18	37	31	24	110
7月	1	3	5	7	16
9月	20	17	15	9	61
10月	13	23	17	28	81
11月	8	21	23	23	75
12月	2	6	3	6	17
計	91	141	122	126	480

Table 2 入室者数一覧（昨年度）（単位：人）

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
4月	20	5	2	3	30
5月	29	11	9	10	59
6月	24	11	8	19	62
7月	21	9	14	13	57
9月	20	10	13	13	56
10月	31	8	15	29	83
11月	28	9	17	19	73
12月	21	7	31	18	77
計	194	70	109	124	497

室した生徒の悩みや困りごとから近況までさまざまな話をし、その中で関係性を構築する機能を担っている。

1-2. 校内巡回

昨年度に引き続き、HSやHS前の共有スペースであるコモンスペース（以下CS）の活動の他にも、数名の支援メンバーが休憩時間や授業の時間帯に校内巡回を行った。休憩時間には、各学年の教室を訪問し、一人で過ごしている生徒に声を掛けたり、その他の生徒にも積極的に話しかけたりした。授業時間における校内巡回では、CSや教室外にいる生徒に対して、声掛けを行った。その際に、数名の生徒から相談を持ち掛けられることもあった。生徒からの相談を受けた際は、先生方に授業の時間帯に院生と一緒にいたことを報告した。

1-3. 教室内支援

前期の初めに先生方へ教室内支援の希望調査を行い、希望のあった3限目の授業に入って支援を行った。今年度は教室内支援を行う支援メンバーを固定せずに、毎週入れ替わりで支援を行った。また、新たに行った取り組みとしては、先生方のニーズだけでなく、生徒と関わっている際に耳にした教室内支援のニーズを反映して、これまで教室内支援に入っていなかった新たな授業に支援を行えるよう、働きかけたことが挙げられる。

教室内支援では臨床心理学を学ぶ支援メンバーの専門性を活かせるように支援を行った。授業についていけない生徒への学習支援をしてほ

しいという先生方のニーズを満たしつつ、生徒に解答を教えるのではなく、疑問について一緒に考えるという姿勢を意識して関わった。また、生徒個人と関わるだけでなく、クラス全体の集団力動にも目を向けることで、生徒間の人間関係を把握することも行った。

1-4. GW

2年目（倉石・横谷・梅井ら2012）から毎年度2回、1年生を対象にGWを行っている。実施期間は昨年同様、前期（6月）と後期（2月）であり、後期のGWは論文提出期日時点では実施されていない。そのため、本論文では主に前期のGWについて述べる。

今年度は、1年生の年齢が幅広いことや、人数が例年に比べ少なかったことから、少人数で固まるのではなく、多くの同級生とも関わるができるようになってほしいと考え「交友関係を拡げること」、「コミュニケーションの取り方を学ぶこと」、という2点をGWの目標とした。前期のGWでは、1年生（1クラス）を対象に『自己紹介すごろく』を行った。参加者を3～4名（1回目）、5～6名（2回目）に分け、グループに1～2名のファシリテーターを配置した。ファシリテーターは支援メンバーと、支援メンバーが所属する大学院の同級生が務めた。ファシリテーターの役割としては、一つのマスに対して、できるだけグループ全員が発言できるようにタイミングを見計らって介入することを心がけた。互いに名前のみ自己紹介しあった後、サイコロを振ってもらい、サイコロを振っ

た人がすごろく盤に書かれているマスの質問に答えていった。マスに書かれた質問は、お互いの意外な一面を見つけることができるようなものや、話が膨らみやすくなるものを意識して支援メンバーで考え、作成した。また、質問は関係性に関わらず、尋ねられても問題のないもの(趣味、好きな食べ物など)を用い、過去の話題に触れる内容を除く、現在や未来に焦点を当てることに留意した。事前に、生徒には答えたくない質問には答える必要がないこと、相手を否定するようなことは言わないことをルールとして設定した。また、友人グループをできるだけ分散させ、対立ししやすい生徒同士は離してグループ編成を行った。

GW 終了後には、先生方と生徒の2種類のフィードバックを作成した。先生方には、GW中に気づいた生徒の様子を明記し、生徒には、良かった点とお礼の言葉を手紙にして渡した。

1-5. 情報共有

①学校との情報共有

支援メンバーは毎回の活動終了後、その日に関わった生徒の中で気になる生徒について、発言や様子などを所定の用紙に記入し、学年ごとにファイル化している。これは、生徒に関する様々な情報を先生方と共有するためである。共有ファイルは職員室に保管されている。清澤・川田・構ら(2016)は、共有ファイルを活用した先生方との連携強化を今後の課題として挙げ、共有ファイルを周知することの重要性を述べている。そこで、今年度は支援の中で、先生方へ共有シートのお話を挙げ、共有シートを媒介にした情報共有を心掛けた。

また、前期の活動を報告する場として、11月に校長先生と話し合いをする機会を設けていただいた。話し合いでは、前期の活動報告に加え、活動の中で気になった生徒に関する詳しい情報や先生方との連携についての考えを直接お伝えすることができた。

②支援メンバー内の情報共有

昨年度までと同様に、活動内容に関する記録

を個人情報に留意した形で保管し、活動内容や生徒の様子などの情報を支援メンバー内で共有している。今年度は、支援日の全体の記録とは別に、対象の生徒について縦断的な視点で見するために、生徒個人のファイルを作り、共有を行った。また、重要な共有事項に関しては、必要に応じて支援メンバーでミーティングを行い、全員が情報を把握することで一貫性と連続性を持った活動ができるよう努めた。

1-6. 広報活動について

今年度も支援メンバーおよびその活動の浸透化を目的に広報活動を行った。最初の広報活動は始業式の挨拶であった。今年度は、支援メンバー6名が始業式に出席し、新入生を含めた全校生徒に向けて、HSの開室曜日と開室時間、活動内容の説明や支援メンバーの紹介を行った。さらに、4月中旬にHSの活動内容を記載したチラシを作成し、先生方を通して生徒に配布し、HSの扉にも掲示した。

継続的な広報活動としては、今年度も“ほっとステーション通信”(以下HS通信)を各支援メンバーが1回ずつ発行を担当し、1年間に6回発行することとした。HS通信とは、清水・妹尾・有福ら(2015)から開始されたものであり、季節の話題や学校行事に沿った内容を中心に作成した。また、支援メンバーの認知と定着を目指し、顔写真とコラムを掲載し、今年度のコラムは、各支援メンバーによるストレス解消法を紹介した。HS通信は先生方を通して生徒に1枚ずつ配布され、HSにも掲示した。

2. アンケートについて

昨年度までは、定時制高校での支援活動について支援メンバーが考察し、報告してきた。支援活動も今年度で7年目を迎え、来年度以降、さらに質の高い支援を行う手がかりを模索する必要があると考えた。そこで、今年度は、生徒や先生方からの客観的なフィードバックを加えて考察するため、初の試みであるアンケートを実施した。

項目については、今年度の活動内容に基づいて設定した。また、生徒用アンケートと、教員用アンケートの2種類を作成し、対象は全学年の生徒114名、先生方30名とした。

配布・回収に関しては、アンケート用紙の作成から配布・回収までの期間が短くなったため、支援メンバーが直接行うことができなかった。そのため、生徒用アンケートは各クラスの担任の先生方に行っていただくことをお願いした。そこで、各クラスに封筒を1部用意し、その中に、人数分のアンケート、配布時の教示を記した用紙、同意書、フェイスシートを同封したも

のを渡した。教員用アンケートは、教頭先生より、先生方の個別の棚に配布され、アンケートについて口頭でもアナウンスしていただいた。回収は回答終了次第、教頭先生に提出していただくことをお願いした。また、生徒用アンケート、教員用アンケートの回答期間は、支援メンバーが学校側へアンケートを配布してから1週間とした。回収率は、生徒57.9%、先生方10.0%であった。アンケート結果をtable3とFigure 2～5に示す。

Table 3 アンケート結果集計表（単位：%）

	はい	どちらでもない	いいえ	無回答
Q1-1 院生が高校に来ていることを知っていますか？	98.5		0	1.5
Q1-2 ほっとステーションを知っていますか？	77.3		19.7	3.0
Q1-3 ほっとステーションに来たことがありますか？	36.4		60.6	3.0
Q1-4 院生と話したことがありますか？	80.3		18.2	1.5
Q1-5 院生は話しやすいですか？	60.6	27.3	4.5	7.6
Q1-6 何か困ったことがあったら、院生に話してみようと思いますか？	31.8	33.3	27.3	7.6
Q2-1 院生が授業に入ったことがありますか？ (今年だけでなく、今まで)	92.4		4.5	3.0
Q2-2 授業中に院生がいたほうが良いですか？	42.4	45.5	7.6	4.5

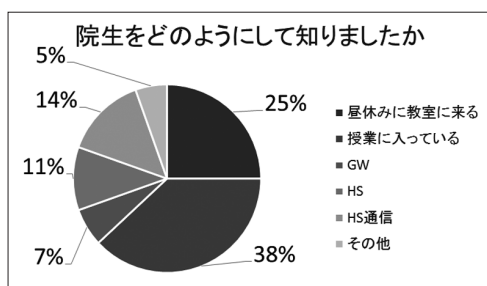


Figure 2 Q1-1の結果

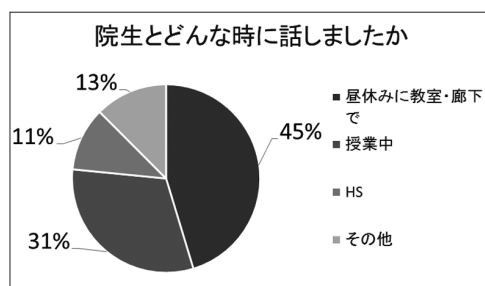


Figure 3 Q1-4の結果

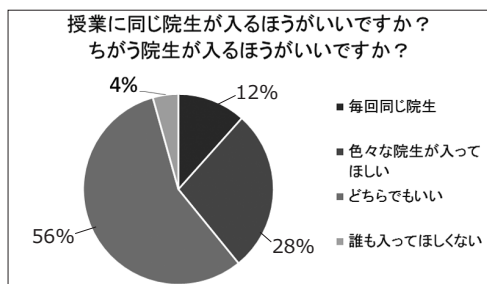


Figure 4 Q2-3の結果

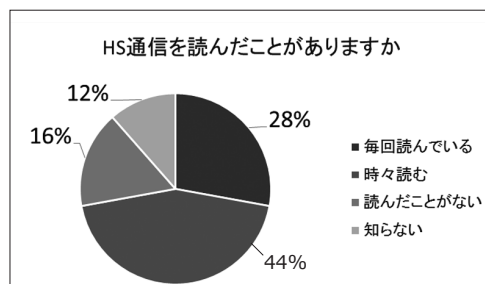


Figure 5 Q3-1の結果

考察

1. 基本的な活動についての考察

1-1. 相談活動

HSに来室する生徒の人数は基本的に一定しており、継続して同じ生徒が来室する傾向にあった。支援メンバーは来室した生徒が困りごとや相談に限らず、話したいことを安心して話せるよう、できる限り一対一の対応ができるように配慮した。その工夫として、校内巡回をしていた支援メンバーが巡回を早めに切り上げてHSに戻り、2人体制にするなどの対応をとることもあった。このような対応が、生徒の継続した来室につながり、生徒にとってHSは定期的に自由に話ができる息抜きの場として機能していると考えられる。

また、基本的に常駐している院生が1人であるため、何名かの生徒が来室した場合に対応しきれないと感じることもあった。そのような場合、支援メンバーが来室している生徒同士の関係性や話題の共通性などから慎重に判断しつつ、生徒間のコミュニケーションを促すような声掛けを行い、円滑なやりとりができるようサポートすることもあった。これにより、HSは息抜きの場としてだけでなく、安心して他者と交流できる場としても機能しているのではないかと考えられる。

1-2. 校内巡回

校内巡回を行った結果として、普段はHSに来室することがない生徒からも相談を受けるまでに至った。それは、校内巡回において生徒との交流を重ね、世間話や他愛のない話を重ねたことにより、支援メンバーとの関係性が構築されたことによるものだと考えられる。また、先生方からも、校内巡回の際に特定の生徒と関わってほしいという相談を受けることがあった。このことから、校内巡回の活動も生徒への支援の一環として認識されているといえるのではないだろうか。先生方から、院生が傍にいて生徒のためになっているといった声をいただ

いたことから、この活動が生徒たちにとって意味のあるものだと考えられる。このように校内巡回を行うことで、HSだけでなく、学校全体が居場所として機能することにも繋がったのではないと思われる。

1-3. 教室内支援

支援メンバーを教科によって固定することなく支援に入ったことで、生徒たちがさまざまな支援メンバーと関わる機会が生まれた。そのため、複数の支援メンバーと関係を作ることができた。活動時間や活動人数などの問題から、同じ支援メンバーが一人の生徒に毎回の支援で関わるのが難しい状況から考えると、生徒にとって話すことのできる存在が一人でも多くできたことに大きな意味があったのではないだろうか。また、多くの支援メンバーと関わることで、生徒が話しやすいと感じるメンバーと関係を作ることが可能となったのではないか。さらに、支援メンバーが入れ替わりで教室内支援に入ることで、気にすべき生徒の情報や支援方法などについて支援メンバー間で相談・共有することができ、より質の高い支援を行うことができたのではないかと考えられる。

1-4. GW

友人グループを分散させてグループ編成をしたことから、開始時は緊張している生徒も見られたが、次第に緊張がほぐれているように感じられた。その要因として、グループ全員が話できるようにファシリテーターが介入したことも、時間の経過に加えて考えられる。GW後に年配の生徒から『楽しかった』という言葉をいただいた。これは、世代を超えて交流ができたことを示唆しているだろう。すごろくの質問を考えた際に工夫したことが、どの世代の人でも楽しむことを可能にしたのではないだろうか。また、支援メンバーもGWで生徒の情報を得たことで、生徒との関わりに活かすことができた。

後期のGWは、「交友関係を拡げること」、「コミュニケーションの取り方を学ぶこと」に加え、先生方から要望のあったアサーティブな自己表

現を目標に加え、GWを計画している。

1-5. 情報共有

①学校との情報共有

昨年度に引き続き共有ファイルは、それぞれの学年の職員室に分けて保管している。これにより、全学年の先生方と接する機会が作れ、活動の浸透化に繋がったと思われる。また、今年度の活動では前年度の課題であった共有ファイルの周知を目指し、可能な限り先生方に共有ファイルの存在を知ってもらえるように声掛けをした。その結果、先生方が多忙でコメントを残す時間を取ることができなくとも、共有ファイルには目を通していているという声を得ることができた。

②支援メンバー内の情報共有

今年度から支援メンバー内の情報共有に生徒個人のファイルを作成した。これにより、支援メンバーそれぞれが関わった生徒の情報が縦断的に集まったものを見返すことが可能となり、生徒個人の多様な特性をつかみやすくなった。

1-6. 広報活動について

継続的な広報活動として述べたHS通信に関して、実際の支援活動の中で直接的な感想をもらったことが多かった。具体的には、先生や生徒から支援メンバーの個性が出ているという声を聞くことや、コラムに関して意見をもらうこともあった。このことから、HS通信は浸透化の役割を果たすだけでなく、生徒や先生と支援メンバーの関係性を形成することに役立っていると考えられた。

2. アンケートについて

Table3とFigure2～5を用いて考察する。

2-1. 生徒

①相談活動と校内巡回

アンケートのHSに関する結果は、Q1-2、Q1-3で「はい」と回答した人はそれぞれ77.3%、36.4%であった。また、校内巡回について、Q1-1、Q1-5で「はい」と回答した人はそれぞれ98.5%、60.6%であり、Q1-4で「昼休みに

教室・廊下で」と回答した人は45.0%であった。以上から、大半の生徒がHSと支援メンバーの存在を認知していることが分かったが、利用経験のある生徒は大幅に少ないことがわかった。また、支援メンバーと話す機会が1番多かったのは「昼休みに教室・廊下で」であり、校内巡回での生徒との関わりを示しており、校内巡回での活動には意義があるといえるだろう。

また、Q1-6で、「いいえ」「わからない」と回答した生徒が合計60.6%であった。この結果から、相談活動と校内巡回について考察する。相談活動について、生徒たちは悩み事や困り事を院生に話したいと思う生徒が少ないことがHSへの来室に影響していると考えられる。しかし、このことは必ずしも悪いことばかりではないと考えられる。悩みや困りごとがある場合、必ずしも支援メンバーに相談する必要はなく、友人や先生、家族など相談できる人が近くにいる生徒が多いのかもしれない。ただ、今回のアンケートでは生徒のソーシャルサポートについては質問していないため、今後検討していく必要があるだろう。

校内巡回では、支援メンバーが昼休みの時間に教室や廊下で話すことが多い。周囲にたくさんの生徒がいる場での会話は世間話などの日常的な内容になる傾向がある。したがって、支援メンバーのことを学校生活の中で身近な存在と感じている生徒も一定数いる。その反面、多くの生徒にとっては、悩みを相談してもよいと思えるまでには至っていないことが推察される。今後は、困ったときはHSを利用できることなど、HSの役割や支援メンバーの活動について理解してもらい働きかけを行っていくことも必要であろう。

②教室内支援

Q2-2とQ2-3の結果から教室内支援について考察する。Q2-2において「いいえ」の回答が7.6%、「わからない」の回答が45.5%であることから、支援メンバーが教室内支援に入ることは生徒たちにとって好ましくないわけではな

いといえるだろう。教室内支援において、生徒と関わる主な支援が学習支援であることから、学習支援を必要としていない生徒や、授業内で支援メンバーと関わる機会のない生徒たちの回答が「わからない」となり、学習支援を受けている生徒たちが「はい」と回答したのではないかと考えられる。生徒用アンケートにおいて、支援メンバーが教室内支援に入ることにについて尋ねた自由記述欄でも、「授業を中断しなくて済むので積極的に入ってほしい」、「読めない字を教えてくれた」など学習支援に関する肯定的な記述が多く見られた。このことから、生徒たちにとって授業内での支援メンバーの活動は、主に学習支援として認識されていることが考えられる。

Q2-3では「どちらでもいい」という回答が57%となり、過半数を占めている。この回答には誰でも構わないから支援メンバーに支援に入ってほしいという肯定的な理由と、授業内で支援メンバーと関わる機会がないためどちらでもよいという無関心的な理由とが考えられる。Q2-2の「わからない」がおよそ半数の回答を占めていることから、Q2-3も無関心的な理由といえるだろう。しかし、支援メンバーが授業にいた方がよいという回答が一定数得られていることから、支援メンバーの学習支援が一部の生徒たちにとって不可欠なものであるといえるのではないだろうか。定時制高校という環境上、授業の進行についていくことのできない生徒への支援は欠くことのできないものであり、先生方からのニーズとしても挙げられている。今後は、現在学習支援を行っている生徒に継続して支援をしつつ、支援を必要としている生徒たちにも行き届くよう、支援メンバーが生徒たちをアセスメントしていくことが重要であるといえるだろう。

また、今年度は教室内支援に入る支援メンバーを固定せずに週ごとに入れ替わりで行ったが、Q2-3で「色々な院生が入ってほしい」という回答が、「毎回同じ院生が入ってほしい」という

回答よりも多く得られた。その差はまだ軽微なものではあるが、生徒たちが関わる支援メンバーが増えることに肯定的な意味を持っていることが考えられる。生徒用アンケートにおいて、支援メンバーが教室内支援に入ることにについての自由記述欄で「院生の人たちの個性がみれるので良い、顔見知りになりやすい」という記述があった。これは、教室内支援が生徒と支援メンバーの関係性を築ききっかけになり得ることを示唆している。このことから、毎週異なる支援メンバーが教室内支援に入ることは、それぞれが生徒と関係性を築くことができる機会を持っているといえるだろう。

③広報活動

Q3-1の設問において、「毎回読んでいる」「時々読む」を合わせて約7割が読んでいるという回答をした。このことから、HS通信は多くの生徒の目に留まることも多く、支援メンバーが直接関わることできていない生徒に対しても発信できるものであることが示唆された。また、HS通信は元々広報活動の一環として発行してきたものであったが、実際の活動の中でもコラムについての話題が生徒から出ることもあった。したがって、今後はコミュニケーションツールとしての機能も果たすことが可能であることが考えられる。

2-2. 教員

今回の実施にあたって、教員用アンケートの回収率の低さが目立った。このことは、先生方の多忙さによることが考えられるが、それに加えて先生方が抱えている支援メンバーの印象を反映しているように思われる。つまり、支援メンバーと先生方とのコミュニケーション不足が根底にあり、関係性を作ることができていなかったことや、支援メンバーの活動意義を伝えられていなかったことが原因ではないだろうか。また、回収率は少ない中でも得られた回答として、共有シートに書かれた情報は有益であるというものがあつた。

以上のことから、共有シートは有効的に利用

されていることが示唆された。しかし、共有シートに頼りすぎていた可能性があり、先生方とのコミュニケーション不足の原因となっているとも考えられる。今後は、共有シートを介しての間接的な情報共有のみならず、限られた支援活動時間の中でも、直接的なコミュニケーションを図ることに努めていく必要があるだろう。

2-3. アンケートの課題

アンケート調査は初めての試みであったため、浸透化などの基本的なことに関する調査を第一とした。しかし、支援活動は今年で7年目を迎え、今年度入学してきた1年生や転校生などを除けば、顔ぶれは変わるものの支援メンバーやHSを認知する機会が頻繁にあったと考えられる。したがって、今後アンケート調査を引き続き行うならば、今回のアンケート調査の結果から浸透化に関する項目などを見直し、より具体的な質問項目を盛り込み、調査することが必要であるだろう。

また、今回はアンケート用紙の配布・回収を支援メンバーが直接行うことはできなかった。教員用アンケートの自由記述欄に「担任からホームルームで配るより、院生さんから直々に渡して頂いた方が、生徒は喜ぶと思います。」との記述があった。支援メンバーが直接配布・回収を行うことで回収率や自由記述欄への記入などが増加した可能性が考えられる。次回アンケートを実施する際は、質問項目を見直す必要もあることから新年度の支援開始早期から準備を行い、支援メンバーがアンケート用紙を直接配布・回収できるよう努めることが重要であるだろう。

今後の課題

先生方との連携が大きな課題として挙げられる。支援活動の中で支援メンバーだけでは対応しきれないと判断した場合には、先生方と連携を図ることは出来ていた。それにも関わらず、支援メンバー内で挙げられた課題は先生方との連携であった。前述してきた先生方との連携や

コミュニケーション不足といった課題に共通して述べられることは、対等な関係を持たない大学院生がボランティアとして支援に携わるという難しさではないだろうか。

臨床心理学的な視点を持って支援活動をする中で、先生方の生徒への関わり方について提案したい方法が思い浮かぶこともあった。しかし、ボランティアという立場である大学院生がどの程度発言してよいものか悩むことが少なくなかった。その結果、提案することができなかったことも多く、筆者らの力量不足を強く感じた。また、日ごろの先生方との直接的なコミュニケーション不足についても、先生方と筆者らが対等な関係でないからこそ、こちらから積極的にコミュニケーションを図り、提案したいことを言えるような関係性を前もって作っておく必要があるのではないだろうか。

今年度は日ごろのコミュニケーションの重要性を認識したうえで、実行することに困難さを感じていた。これは、目上の人と接する際の筆者ら自身の課題について向き合うことが必要であったといえる。今後も先生方との連携不足が課題と感じられた場合は、支援メンバーそれぞれが原因について考え、向き合うことが重要であるといえるだろう。

謝辞

今年度も貴重な学びの機会を与えて下さった定時制高校の皆様方に感謝致します。今後とも尽力して参りますので、引き続きご協力のほどよろしくお願ひ致します。

文献

井上奈々・大川慧・洪川沙由里・中西達也・西中さおり・矢野礼花・清水達哉・妹尾美鈴・中田行重 (2014)：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その4）—改訂版支援モデルの提示—『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』4：11-20。
清澤千絢・川田麻菜美・構美穂・向坂俊佑・佐藤葉・高橋圭佑・中田行重 (2016)：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その6）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』6：67-74。

- 倉石百合子・横谷美幸・梅井茜・高石唯・船曳奈央・中條淳博・津田雅志・中田行重（2012）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その2）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』2：71-78.
- 中田行重・中村絢・日野唯花・丹羽由子・福山侑希・菅野百合子・横谷美幸（2011）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その1）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』1：23-31.
- 清水達哉・妹尾美鈴・有福和・羽田野瑛子・宮地佑香子・結城進矢・向坂俊佑・佐藤栞・中田行重（2015）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その5）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』5：109-117.
- 山見有美・細見知加・吉川真衣・西中さおり・中條淳博・津田雅志・中島妃佳里・井上奈々・中田行重（2013）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その3）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』3：79-87.